

令和4年度第2回千代田区生物多様性推進会議 議事要旨

(開催要領)

1. 開催日時
令和5年3月24日(金) 14時00分～16時15分
2. 開催場所・方法
千代田区役所4階 会議室 AB ※WEB会議と会場の併用
3. 出席委員(11名)
亀山委員(座長)、加藤委員(副座長)、須田委員、城委員、竹内委員、大井委員、坂口委員、積田委員、二戸委員、青山委員、印出井委員
4. 欠席委員(1名)
中村委員
5. 事務局及び関係者(8名)
笛木環境政策課長、松下企画調査係長、山浦優加事業推進担当係長、只野公害指導係長、落合エネルギー対策係長、株式会社地域環境計画(3名)

(次第)

1. 開会
2. 議題
 - (1) 区民参加型モニタリング調査(生きものさがし)について
 - (2) セミ羽化観察会・秋のどんぐり観察と生きもの楽習会について
 - (3) 令和4年度ちよだ生物多様性大賞について
 - (4) ちよだ生物多様性推進プランの改定について
3. 閉会

(配付資料)

- 次第
- 委員名簿
- (資料1-1)区民参加型モニタリング調査(生きものさがし2022)実施報告書
- (資料1-2)令和5年度区民参加型モニタリング調査(生きものさがし)について
- (資料2)セミ羽化観察会・秋のどんぐり観察と生きもの楽習会について
- (資料3-1)令和4年度ちよだ生物多様性大賞の状況
- (資料3-2)令和4年度ちよだ生物多様性大賞事例集(案)

- (資料4)ちよだ生物多様性推進プラン改定素案のたたき
- (参考)環境省・東京都参考資料
- (参考)令和4年度第1回千代田区生物多様性推進会議 議事要旨

(議事要旨)

1. 開会

2. 議事

(1) 区民参加型モニタリング調査(生きものさがし)について

- 事務局より資料1-1、1-2の説明

<須田委員>

・トンボ、カエルは「種名」ではない。皇居内ではスジグロシロチョウが確認されており、モンシロチョウとの関係、パワーバランス(両種の分布が占める範囲の関係)が気になる。バイオームは写真を撮影して登録する仕組みなので、種の同定の精度が上がる。環境改善のバロメータとする調査なのでこれまでの結果を評価したうえで次年度の調査に移ってほしい。

<加藤委員>

・在住在勤在学者に関心、親しみをもってもらうことにウェイトをおいたものにした方がよい。バイオームアプリをどのように使うか、どうアナウンスするのがよいか、実験したうえで取り組んでほしい。

<竹内委員>

・大丸有エリア生物多様性連絡会、グリーン東京研究会と一緒に(大丸有エリアの生きもの確認調査の)研究を続けている。その中での課題、良かった点など、担当者から情報提供できるのでぜひ活用してほしい。

<須田委員>

・バイオームはこの手のアプリとしてはとても良いもの。ただ、年齢層が低いと保護者と一緒に使うなどとなる。キックオフイベントなどで一緒に使ってもらって慣れてもらうことができるとよい。

<事務局>

・小学生には夏休み前に配布する資料やパンフレットを参考にはがきで報告して

もっている。この方法はこれまで通り継続する予定。広報、情報発信を積極的に行っていききたい。

<加藤委員>

・バイオームを活用すると参加者の年齢層は上がるかもしれない。小学校高学年～中学・高校生の年齢層にうけが良い可能性はある。従来通りの発信だと弱い可能性があるので、理科教育の先生に働きかけると効果的ではないか。

<事務局>

・高学年にも参加してほしいという思いもある。校長会の場などで呼びかけていく。
・バイオームではニックネームを使って報告することができる。報告される生きものの情報は写真、日時、位置情報などで、データベース化され把握することができるようになる。

<亀山委員>

・これまでの実施期間と異なり、実施しない期間があるが、実施しない理由があるのか。

<事務局>

・春編をいったん集計して結果を公表することで夏編に向けて更なる参加者を呼び込みたい。参加者が期間中に10種類の生きものを選んで投稿する仕様のため、期間を区切ってそれぞれ参加してもらおう方が多くの投稿を見込めると考えている。

<亀山委員・須田委員>

・クエスト達成目標期間は2回区切りにするとしても、それとは別に期間を区切らず、報告をすることができるようにした方がよい。

<加藤委員>

・個人情報保護の管理上は問題ないか。

<須田委員>

・ニックネームは個人をたどれることもある。番号にすると良い。

<青山委員>

・東京都でもバイオームアプリに関心を持っている。レッドリストはつくってい

るが普通種情報は乏しい。バイオームアプリを使って普通種の情報を収集することも考えられる。区市町村の取組みともうまく連携してできるとよい。

<坂口委員>

・参加者は9才以下が多いとのことで、小学校高学年の参加者が少ないことが残念である。小学校高学年や中学生にいかに関心をもってもらえるか、深刻な地球環境問題を伝えつつ、ローカルでは足元でできることをやっていけるとよい。参加することで地球環境問題解決の何に貢献できるのかを併せて伝えていけると参加を促せるし、参加者の年齢層もあがっていくのではないかと。

<坂口委員>

・学校と連携しながらやっていけるとよい。児童生徒には学習用のタブレットが配布されているのでそのタブレットを使ってまずはモデル的に実施して、広げていく。ちなみに私に関わっている富士見小学校では、屋上庭園を使って高学年対象にやっていくような発想もできる。

(2) セミ羽化観察会・秋のどんぐり観察と生きもの楽習会について

- ・事務局より資料2の説明

<亀山委員>

・この事業はいつ頃から始めた事業か。

<事務局>

・平成23年度からの事業で、これまで継続して実施している。

<亀山委員>

・この事業で得られる生きもの情報も大事なデータの一つ。応募が100組もあるのに参加者が限られるのは残念。参加したい人は多いのでどうしたらより大勢に参加してもらえるか考えた方がよい。

<事務局>

・今年度は特に応募が多く、以前はここまでの応募者数ではなかった。どうにか回数・参加者数を増やせる方法を考えていきたい。

<須田委員>

・大勢での参加となった場合に重要なのは先生役である。知識や技量があれば学

生やアルバイトにやってもらうこともできる。しかし安全管理上の問題もあるの
でどこまでキャパシティを確保できるかが課題。やれる範囲で増やせる方法を考
えられるとよい。

(3) 令和4年度ちよだ生物多様性大賞について

- 事務局より資料3-1、資料3-2の説明

<事務局>

・今後、大学の環境関連のゼミ研究室にも活動事例集を配布して応募を募りたい。

<加藤委員>

・企業と大学ゼミの合同グループが表彰対象となったことが良い。特定の大学ゼミに限らず広がっていくことを期待している。

<積田委員>

・東京都生物教育研究会に都立高校の生物教員は加入している。私立には東京私学教育研究所もある。私立の理事長校長は、毎月の支部会に参加している。このような会にお願いすれば、説明の場を設けてもらえ、チラシ配布も頼めると思う。

(4) ちよだ生物多様性推進プランの改定について

- 事務局より資料4の説明

<印出井委員>

・1章、2章でのポイントである、①気候危機と生物多様性を一体で取り組んでいくこと、②コロナ禍コロナ後の動きに対して戦略でどのような対応が考えられるか、③千代田区としてネイチャーポジティブをどのようにとらえ、どのように展開していくべきか、ということをご意見いただきたい。また、ネイチャーポジティブは区内の取組みだけでは難しく、地方と連携した森林整備やブルーカーボンの取組みも視野に入れていくことが必要ではないかと考えている。

<大井委員>

・日本版OECDでは企業の取組みが進みつつあるが、企業がどのように地域に貢献できるかが重要である。昼間の在勤者は区内の情報をあまり受け取れていないことも課題。

<亀山委員>

・千代田区の特徴である昼間人口を踏まえ 100 万人都市ととらえて考えることを最初の方でしっかり書き込んでほしい。

<印出井委員>

・中小企業や区民には、生物多様性にかかわっていくことでメリットがあること、経済的にもプラスになるということを示していきたい。

<加藤委員>

・第 2 章の内容が偏っている。かなりの部分が生物の状況と区民の理解度や考えに集中している。課題は示されているが、46 ページ目の(2)地域社会に係る課題の「①区外の資本・資源を消費しながら成り立っている都市としての意識の向上と責務」に関連する記述がほとんどない。エビデンスとなる経済活動の実態の情報などを加えられるとよい。

<加藤委員>

・「エコロジカルネットワーク」が常に良い方向に働くという理解で書かれている。しかし大規模でかつ重要な生態系拠点に外から新たな生物（外来種など）が入ってくるというリスクもある。大きな木だけがあり、地表付近の植生が乏しい場合は、特定の生物への貢献に限られる点も考慮が必要である。

<須田委員>

・外来種ネットワークを構築してしまうおそれもある。特に都心やその周辺では外来種が多いので慎重な対応が必要。

・千代田区は皇居という究極の大規模緑地があり、日本の両極端な環境を併せ持つ特殊な立地にある。一つのキーワードは「皇居から周辺につなぐ」という考え方、また、30%になるように創出・再生していく・質を高める努力を積み上げていくという考えもネイチャーポジティブの一つとしてとらえることができる。

<亀山委員>

・30by30 を目指して再生する、という意識が大切。

<竹内委員>

・外来種に関しては、大丸有地域で 8～9 年前に外来種対策ガイドラインを作

成、他企業（不動産会社）にも情報開示・共有している。丸の内だけでやっても限りがあるので周辺と連携して取り組むことが重要。

<坂口委員>

・昼間人口が多いため自分事としての関心が薄いのが問題。自分事として皆が理解し目標に向かって行動していく、そこに訴えていける改定内容になるとよい。推進会議メンバーを使って具体的取組みをしていけるとよい。

<亀山委員>

・千代田区の昼間人口は多いが、一方で在住者は増えており、まちが変わってきていることを適切に表現すべき。新たに移り住んだ人、高層化しているまちにどう対応していくか。

<積田委員>

・私は2007年に移り住んできた。当時に比べ、住民はだいぶ増えた。
・区民参加型生きもの調査の話にも関連するが、生きものが好きな人は、生きものを発見すると、その場所を地図上に記録したいという思いがある。

<須田委員>

・データ収集の手段としてのバイオームはよいが、実体験を増やす、深める機会も必要。

<加藤委員>

・生物多様性の2050・2030目標は、先に2030目標を実現した先に2050目標があるのだが、現状から何を変える、何をすると2030目標にたどり着き、その先さらに2050に行きつく、という時系列が読み取れる見せ方にできるとよい。
・「ネットワーク」が生態系ネットワークの話なのか、人のネットワークの話なのか、使い方に注意が必要。目標と行動計画の対応関係が必ずしもよくない。たとえば1-1の③は1-2あるいは2-1に関係が強い。1-1④もその先の活用を考えると2の方につながるなど。

<青山委員>

・千代田区は大企業の集積と皇居の大きな拠点があるという特徴がある。企業の従業員の行動変容の取組みを進める必要性があり、そのことで区内だけでなく従業員が住む区外地域への波及効果もある。

<城委員>

・自然共生サイト申請を予定しており、申請にあたって収集整理しているエコロジカルネットワークに関する資料の区への情報提供が可能である。

<二戸委員>

・北の丸公園では、これまで樹木管理がしっかりできていなかったもので、昨年度から樹林地の整備を始めている。生物多様性の視点も重視して林床が明るくなるように剪定や除伐、捕植等を実施している。次年度以降も引き続き行っていく。

<亀山委員>

・北の丸公園では、ぜひ管理の結果としての樹林調査モニタリングを行っていただきたい。

・会議当日は説明なしでできるかぎり意見出しに時間を割けるよう、事務局には資料を一週間以上前に送る配慮をいただきたい。委員は会議前までに資料を読んでおくこと。

3. 閉会

- ・事務局より

・次回の推進会議は今年6～7月ごろに開催予定である。開催時期によっては、バイオームを使った「生きものさがし」の春調査の結果も整理して報告する。

以上